

ブルーアトラス物語

●
後編



第十七章 龍がきれた

「カンパ〜イ！」みんないい顔をしていた。

「やった〜」という充実したメンバー達の顔があった。

「今日はどこでやってきたの？」

「う〜ん。若葉の郷だよ」

「あ〜、うちもお弁当届けてるから〜」

「いやあ〜 感激しました〜」

「ヘイさんはスターになってしまっし〜」

ハナちゃんは、またクスクス笑った。

「へ〜。おもしろそうな話だね」

最近、なにかと飲み会があると、町内にある「リズム」というスナックに集まっていた。そのママさんがまた音楽が好きで、というより亡くなったご主人が音楽に詳しい人で、ブルーアトラスの事も応援してくれてた。そのご主人が急に今年の春に亡くなってしまっただけからでも飲む時はここに集

まっていた。飲み終わってからブラブラ歩きながら自宅に帰れるのがなにより便利であった。

今夜もワイワイと今日の反省会をしながら楽しく飲んでいた。

いつものことながら、甘谷さんはギターを弾きながらBGMである。

「今日はなんといってもヘイさんだよ」

「もう、みんなに囲まれて握手責めだもんね」

「へー なんてまたそんなに一人でモチちゃったの？」

ママが不思議そうに聞いてきた。

ハナちゃんがそれに、おもしろおかしく説明をする。

ゲラゲラ…ワイワイとその場は大いに盛り上がった。

十一時近くになって、高田さんもハナちゃんも坂口さんもいい加減酔っぱらってきて、段々雲行きがおかしくなってきた。

「私は、本当はビートルズが嫌いなんだよー!」

「どこがいいのかなあ」

高田さんが酔っぱらって寝たり起きてたりしていたと思ったら突然しゃべりだした。

大きな目をギョロっと一点を見つめてかなり酔いが回っている感じだったが、「ビートルズが嫌いだ」で反応したのが当然坂口さんである。

「ん?どついうことー!」

「高田さんにビートルズをなんやかんやいわれたくねーな!」

ハナちゃんをも巻き込んだの言い争いがクドクドと続いた。いつの間にかお互いに罵倒を繰り返し始めた。

「いい加減にしろ!」龍が注意しても聞く耳を持っていない。せっかくの楽しい一日が飲み会でスタスタにされるのは許せなくなってきた。

「酔っぱらいはこれだから…」甘谷さんは、二人のやりとりを聞いていたが不快感をモロに顔に出しながら「どつしょう」という顔で龍を見た。

珍しく龍がきた。いよいよ我慢が限界にきたのだ。

龍は急に立ち上がるとテーブルをいきなり拳で叩くなり、

「おめーら、いつまで、グタグタいつてんだあー!」

「いい加減にしろ!」

「せっかくのいい一日がめちゃくちゃだべ!」

「バンドなんか解散すっぞ!」

高田さんと坂口さんとハナちゃんは、龍の急の大声にキョトンとしていた。

ママさんは「さあ、今日はもうお開きだね」と苦笑いしながら言った。

「ママさん。勘定してね」

リーダーと龍は立ち上がった。

残りの三人はまだブスブスいつている。

第十八章 坂口、高田夫妻やめる

あの不愉快な飲み会があつて、しばらく練習もしなかった。また、予定も全然入っていなかった。

「へいさん、坂口さんから電話がきてさ。」ハナちゃんとマンションのエレベーターの前で久しぶりにばったり会うと話しかけてきた。

「どうしたの？またなんかあった？」

「うーん、実はこの間、ビートルズのバンドに誘われて坂口さんと一緒にオレも行ってきたのさ。」

「それで」

「オレはビートルズ、そんなにやる気がないんだけど、坂口さんはすっかりその気になってさ」

「うん。そっちでやるってか？」

「うーん。ブルーアトラスはやめたいってさ。」

その頃、高田夫婦もやめることに決まっていた。

「これ以上、やっても…って旦那がね。」

「私はやりたいんだけど…。私だけ練習にもこれないし」

「そんなわけです。」

あの日以来、練習の再開もなく、高田夫婦はやめていった。そして、坂口さんも結局はビートルズがやりたいといってブルーアトラスをやめた。

またしてもブルーアトラスの危機だ。うまくいかないものだ。それぞれの嗜好があるし、趣味だから自分のやりたいことをやればいいのだが、残された人達はそこでストップしてしまうわけで、また一からやり直しになってしまう。

せつかく築き上げたブルーアトラスのサウンドはあっけなく終わってしまった。

残された三人は珈琲を飲みながら打合せをしていた。

「どうしよう。解散する？」甘谷さんも元氣なくシヨボンとしていた。

「うゝん。せつかくここまでできたのになあゝ」と花山さん。

「もたないね。町内会にも来年企画書を提出して進み出そうとしてる矢先だしね」

「また、チラシをまくか」

「んだね。町内に好きなヤツいるかもしれないし…」

ということで、町内だけに新聞折り込みチラシをいれてみることにした。

数日して甘谷さんから電話がきた。

「女の人から電話きたよ」

「へえ〜。」

「キーボードやれる？って聞いたんだけど…そっちは多少やれる程度らしいよ。」

「ボーカル？」

「なるほど、女性ボーカルね」

「とりあえず、きってもらったら」

とりあえず折り込みチラシは一人ではあったが成果があった。しかし、今のブルーアトラスでは、女性ボーカルは無理があったし、キーボードも自信はなさそうだった。二、三回練習をただけでなく終わってしまった。

ところがそのあと、新生ブルーアトラスは新しいメンバーがあっけなく揃ってしまった。

町内だけのメンバーで結成された純血メンバーは崩れてしまうことになった。甘谷さんの知り合いからの紹介で達ちゃんバンドという小学生の先生で作っているバンドのリードギターの人を借りてきたのだ。

何が何でも継続したい甘谷さんは喜んではいたが龍は少し違う方向に走り出しているブルーアトラスが遠く感じてた。

ほどなくして今度は「おれの高校時代の同級生でバンドやりたいヤツがいるんだけど、連れてきてもいいすっか」と花山さんが言いだした。

龍は断る理由もなく「いいんじゃない。連れてきたら…」とは言ったものの何か気持ちは明るくはなれなかった。

一体、ブルーアトラスはどこへ向かおうとしているのか…。そして、龍は…。

第十九章 夏祭りの企画が通る

三月になって、龍は二丁目の加賀会長にあった。

「これ、今年の夏祭りの時にやりたい音楽祭の企画書なんですが見て貰えますか？」

「おう、できましたか？」

すぐに目を通してながら、加賀会長はニコニコしながら

「分かりました。今度の連合町内会の集まりの時に、提案しておくから…」

「そうですか。よろしく願います。」

龍は、今年度も町内会に残りこの音楽祭をやるうと決めていた。ここまで来たのにやめる気はなかった。

ブルーアトラスも新編成で、少しずつ進んでいた。坂口さんのビートルズもオールディーズもなく
なり、歌は龍の加山雄三とGSが少し残っただけではあったが、ベンチャーズの曲数は倍に増えてい
た。

五月にはいつてから、加賀会長から連絡があった。

「平井さんの企画は、会議でやりましょうということになったから…」

「へー、通りましたか！」

「うん、今度の三丁目の会長が替わって、夏祭りの企画担当になったんだが、平井さんの企画に乗ろうといってくれて…」

「グッドタイミングでしたね」

「今度、紹介すつから、その時に詳しく説明してやって」

龍の音楽祭の夢が実現しそうになった。町内会の固い頭を少し動かしたのである。

龍の音楽祭の企画は、数バンドを集めるものではあったが、時間割、音響、ステージ、照明にいたるまで細かく具体的にまとめたのであった。もちろん、すべてはこれから何の当てもなく大変なことになるうとは、正直考えてもいなかった。時間はあと三ヶ月もない。さて、なにから手をつけていたら良いものやら…。

龍はとにかく出演者を集めなくてはならない。

ブルーアトラスと達ちゃんバンドは決定。そして、嬉しいニュース。ハナちゃんの奥さんの友達で、女性デュオグループが是非出たいと連絡があった。キーボードの音大生とボーカルの二人だった。ブルーアトラスがバックで伴奏もするということで決定した。

そして、あの坂口さんに久しぶりに電話を入れて今の状況を話した。念願のビートルズバンドの仲間に入って、腕をあげてほしい。

「へーさん、夢に向かってますよね。私もやってみましたよ」

「それで、今度の夏祭りにぜひ出演してほしいんだけど…」

「いいですよ。メンバーに了解をとりますから」

と坂口さんも快く出てもらうことになった。

それから龍が考えていたのは、子ども達のバンドだった。毎回小学生のバンドが夏祭りの時に別枠で演奏していたので、一緒にやったらと思っていた。小学生の父兄を頼りに聞いてみると、和志先生という音楽大好き先生が有志を募ってバンドを作っているらしい。

和志先生に連絡をとって打合せをさせてもらった。若い独身の先生で優しい目が印象に残った。夏祭りの時に何度か顔を見ていたので、「あゝあの人っか」と龍は思った。

和志先生は、楽器やアンプのことを気にしていたが、全部協力するということでは出演を了解してくれた。学校の許可は先生の方でやってくれそうだ。

出演者は固まった。このメンバーなら充分にやれると龍は確信した。

龍は音響のことは決めていた、

初めての夏祭りの時に会ったヒゲの人なつくく話しかけてくれたおっちゃんの所在を町内会の担当者に確認して直接連絡をいれてみた。県北の住所だった。

「私、前に夕陽が丘の夏祭りの時にバンドをやった平井といいます。今度の夏祭りの件ですが……」

簡単に内容を説明すると、

「はいよ、今度打合せに行くからっさ」

快く話を聞いてくれることになった。

「他でもPAやってるから大丈夫だよ」

「任せて」

「今まで持っていかなかったでかいスピーカーもっていくからしゃー」

ポンポンと楽しそうに話した。本当に明るいい人だ。これで音響も目途がついた。

あとはタイムスケジュールと場所の確認と照明だった。

これは、町内会の役員と話して決めなければならなかった。これが一番の難題であった。

三丁目の会長には加賀会長に紹介されて挨拶をしていた。企画書も提出して、おおまかな了承を得ていた。

ところが、白髪の町内会の主みたいな存在のじーさんが、「やるのは土曜日の開会式のすぐ後にしてくれ。」と相変わらず命令的な言い方をしてきた。青山というじーさんで初代の会長らしい。

龍は、せめて六時以降にしてくれるように頼んだ。開会式の後とは四時頃の話だ。観衆がいないのは何回かの経験済みだし、せっかくの音楽祭が死んでしまふ。龍は時間帯だけは絶対に譲らなかつた。

「こつちにも予定があるから…」とその青山じーさんが大きな声で反論してきた。企画担当の三丁目の会長も困った顔をしている。

「とにかく、六時ですから！それ以外はやらない」龍は今度は妥協が許されないと思っていた。一人ではない。ブルーアトラスだけの問題ではない。出演者が気持ちよく演奏してくれる責任を龍は感じていた。

「前夜祭は、盆踊りの練習時間にしてるだけじゃないですか」

「去年も見ましたが、何の企画がないからダラダラした感じで…」

「六時から七時半くらいまでの音楽を認めてもらえないのですか？」

企画担当会長が、龍の顔をみて、あとは私かなんとかするからと合図してきた。龍もこれ以上やりあうと音楽祭が企画倒れになるかも…と了解した。

第二十章 いよいよ本番を迎えた

三丁目の会長とぼったり市民センターであった。

「いやぁー、平井さん」いつも手を挙げながら大きな声で誰にでもこういう風に声をかける人だ。

「この間の、夏祭りの時間のことだが、青山さんにも了解してもらったから…」

「練習の方は順調ですか」と一方的に話して急ぎ足で外に出てしまった。

まあ、とりあえず時間は思い通りになった。ただ、小学生バンドは時間を早めて終わらせることにした。子ども達の関係者が集まってくるのであまり時間は関係ないからと、和志先生にも言われていたので開会式終了後に演奏をすることにした。

6月の半ばには音響のおっちゃんが出てきて、打合せをした。

「こんにちは。やりましたね〜」

「いよいよ本格的にやるんですね〜」とニコニコしていた。

音響のおっちゃんはブルーアトラスが夏祭りデビューしてから、ずっと横でみていたので事情に

は詳しくかった。自分のことのように喜んでくれた。

「今まではカラオケとBGMと盆踊りだけだったから、正直二日間はお暇だったもんね」

「んだよ、儲けたべ〜」

「いや、それはないけど」

「今回からいろいろお世話になりますから。よろしくたのみますね〜」

バンドの構成、スピーカーの数、マイクの本数、スタンドの数、当日のタイムスケジュールなど色々な詳しい情報をメモして、帰っていった。

出演バンド、演奏時間、音響、着々と龍は決めていった。

しかし、会場の設営からなのでステージをどこにするか、暗くなつてからの照明のこともあった。音響さんの配電もあったし細かい決めごとがまだまだあった。結局何から何までやらないと前に進まないのだ。

龍の仕事が自営業でなければ、こんなことは到底やれなかったと思う。頼りのバンド仲間も日中は仕事でいないし、町内会の中には助けしてくれる人はいなかった。

龍は、夏祭りのポスターとプログラムの作成も任されてデザインした。こちらは龍の本業だったのでいままでの素人さんが作ったものとはまるで違った。これには、企画担当の会長が大喜びしてくれた。

龍の町内会の中での存在が急に広がってしまった。音楽祭の企画提案から始まって、こと細かいところに渡って任されたというか、言い出しっぺがやらずにして誰かがやってくれる訳でもなかった。龍は忙しかった。しかし、自分が提唱した音楽祭が徐々に出来ていく。楽しかった。

夏祭りに向けて、ブルーアトラスの練習も忙しかった。音大生のデュオグループのバック演奏もあり、今回はかなりハードになりそうであった。

新加入の達ちゃん、ハナちゃんの友達のソウちゃんもすっかり溶け込んで、演奏に関しては龍の手がなくても充分こなせるようになっていった。龍はすっかり涉外系の役を一手に引き受けるようになっていた。それでも龍はブルーアトラスのなかでプレーヤーとして一生懸命ギターを弾き続けた。

7月の最後の土日、いよいよ本番を迎えた。朝からジリジリと太陽が照りつける夏らしい天気になった。

唇前に音響の加納さんが予定通りトラックに機材をいっぱい積んでやってきた。助手席には奥さんと小学生の娘さんが同乗していた。

「こんにちは。家族総出です」と音響のおっちゃんは大きな歯をムキッと出して笑った。奥さんも娘もニコニコとしたいい家族だった。

「場所はこの辺りでいいですよ」三丁目の会長に手渡しておいた図面をもとに指さした。「え、いいですよ。あの辺りに準備してください」

「加納さん、じゃこの辺りをステージにしますから、車移動してください」さっそく、バンド仲間達が総出で機材を降ろし準備にとりかかった。

市民センターと会場広場の間は高さに段差があって、十数段の横長の階段になっている。龍はその階段を利用してステージにしたらいと提案していた。それと屋台が建ち並ぶ方に近い左よりの五、六段目が観衆と演奏者との高さ具合が丁度いいと思ったのだ。

広場の中央に櫓が設置されて、広場の左側が屋台、右側が役員の本部テントという配置になっていた。ようするに櫓で分断されてるような配置だ。龍はそれにも口を出したかったのだが、それはまた別の担当の会長がいるのですがにそこまでのエネルギーはなかった。

階段の左側に機材関係を降ろし出した頃に、例の青山じーさんが指さしながらやってきた。

「だめだめ！そこじゃなくて、もっと本部側にして！」

「いや、ここということでした了解してるのですが！」

龍は青山じーさんには、喧嘩腰になる。というか先方もそうなのだろうと思う。

「本部に向かってやってもらわなきゃ」

この爺さんは何を考えてるのか？

町民が喜んでもらうための夏祭り。町内会の役員のためにやってる訳ではない。また、準備がストツプした。メンバーも音響の加納さんもイライラし始めている。

「わかりました。少しだけ中央に寄りますか。」と龍はその場をまず納めた。

第二十一章 問題山積の夏祭り

三丁目の会長も青山じーさんにはあきれた様子で

「青山さん、まあまあ」となだめるように背中を押しながらその場から移動していった。

とにかく、龍の行動が気に入らないのか……。始まる前からこれでは先が思いやられた。

機材のセッティングが済んで、ようやく音だしに入った。もう予定から随分と時間がずれていたの
で、龍の作ったタイムスケジュールはメタメタになっていた。夏の日差しと進まない予定で龍のスト
レスは今にも爆発しそうだった。

開会式まではもう一時間もない。バンド毎の音を調整して、まずは小学生のバンドの演奏に備え
た。

子ども達は顔を赤らめて緊張した様子だった。和志先生は慣れた様子で子ども達に接していた。さ
すがである。和志先生がドラムで真ん中に座ってキーボード、ギター、ボーカルの子ども達が数人立
ち位置を決めた。

少し音を出していると関係者の父兄がなるほどカメラやビデオをもって周りに集まってきた。そして
小学生の仲間達がうらやましい顔をして下から見上げていた。やはり階段の上にしたのは成功だった

父兄達は我が子を撮ろうとデジカメのシャッターを押していた。バンドの子ども達はその父兄達に囲まれた中で二曲演奏した。まるでその部分だけが別の世界のようだった。

親子みんな満足そうな笑顔で先生へ挨拶を交わしていた。まるで授業参観の一貫のような雰囲気ではあった。ここもやっぱり自分の子どものことばかり気にしている。ご時勢なのだろうか。なぜここで演奏できてるのかなど全然分かっていない様子だ。

和志先生だけが、「どうもありがとうございました。」とお礼にやってきた。親と子ども達はそくそくと引き上げていった。

大人達のバンド演奏にはまだ時間があった。

「ご苦勞様です」とあの高田夫婦がやってきた。

「お手伝いしますよ」と言ってくれた。

あんな風に終わってしまっていたが、基本的には音楽好きの仲間ではあった。

「は〜い。サンキュ。この辺りにいてて。何かと人手不足だから」と龍はほっとした気持ちになっていた。

「腹減ったね〜。」とハナちゃん。

そういえば、音楽の出演者には弁当も飲み物もなにも町内会からは出なかった。

「甘谷さん、今回はブルーアトラスでみんなの弁当と飲み物買っしかないね。」

「そうだね。みんな腹減ってるし、各自なんか買って来てるみたいだね」

「こっちから、なんか買わないと恰好つかないよね」

「会費から出すから」

と隣のスーパーにいつて弁当とビールを買いにいった。

「ひどいもんだね。役員達はえらい豪勢な弁当食ってたな」

「俺たちには何もなしですか」

「これじゃ、やる気起きないよ」

考えてみれば、龍もそこまでの手配はしてなかった。

「今度は出してもらうからっさ」と龍も思えば腹がたつばかりであった。

「ところで、聞く人はどこに集まるかな」

素朴な質問ではあった。

「そうだね。椅子を並べれば自然にそこに集まるよね。」

龍は市民センターの事務室に走った。

「所長、椅子を並べたいんだけど。ありますかね」

「体育館にいっぱいあるよ」

「運んでもいいですか？ ステージの前に客席を作りたいんですが…」

「いいよ」と顔馴染みの所長がニコニコしながらOKを出した。

「おーい。あつたからみんなで運ぶよ」龍は走りながら戻ってきてみんなに伝えた。

みんな立ち上がって、市民センターの体育館に集まって椅子を運び出した。椅子は専用の車に載ってたくさんあった。

「これで客席ができれば、コンサートという感じにはなるよね」みんな、一生懸命に運んでいた。

すると、あいつだ。

扇子を差し棒代わりにしながら、血相を変えて走ってきた。

「こら〜！ どっから持ってきた〜！！」

みんな椅子運びをストップさせた。

本部の役員に断らずに動いた龍にも責任はあった。しかし、事情を話しても「戻せ！」の一边倒。「この椅子は、連合町内会で正式に借用しているものだ」

「勝手なことしよってー！」

せつかくきれいに並べた椅子。

「市民センターの所長の許可も得たし、使わせてくださいよ」

龍は下手にはでたが、腹の中では「この椅子はお前の持ち物か」と切れそつになっていた。

三丁目の会長と市民センターの所長も出てきて、まず並べた椅子はいいでしょうということにはなったが、龍はさすがにもうたくさんだと思った。へとへとになってる自分は最後まで気力がもつかどうか自信がなかった。

第二十二章 疲れ果てた夏祭り

龍が「夏だ！祭りだ！音楽だ！」のキャッチまで考えて企画した夏祭り。先頭にデュオグループ。達ちゃんバンド、坂口さんのビートルズバンド、トリがブルーアトラスの順番でひとバンド三〇分。二時間のスケジュールを組んだ。

ブルーアトラスは最初のデュオグループのバックバンドと最後に出てくるということにした。

手伝うよと言ってくれた高田さんの奥さんには、スケジュールのタイム管理を頼んだ。それぞれの演奏時間がオーバーしないように監視する役目だ。勝手にズルズルやられると時間がオーバー気味になってしまう。それでなくてもうるさいじーさん達が騒ぎ出すのはもう勘弁して欲しかった。

高田さんの奥さんは厳しくチェックをいれた。観客席の一番前に陣取って白い画用紙に「残り何分」と大きな字で演奏者に知らせてきた。その注意を無視してもう一曲やった達ちゃんバンドには恐い顔をして厳しく注意をしに行ったくらいである。

「あなた達、先生でしょう！決められたことを破るとは…。最初に時間厳守の話は平井さんも言っていたし…」

達ちゃんは「スイマセン！」とわざわざ缶ビールをもって謝りにきた。「おっかね〜」と苦笑いしていた。

久しぶりの坂口さんは、ベースギターを担当してポール・マッカートニーだよとおどけていたが、いつの間にかベースを覚えて歌っていた。「すげー、ベース弾きながら歌うのは難しいよ。リズムがまるで違うし」と甘谷さんは驚いていた。

「彼は本当に器用だよね」

「歌もいいよね」

暑いのにメンバー全員は黒のスーツを着て熱唱した。坂口さんのビートルズは恰好よかった。観衆の拍手は大きく、かなり会場は盛り上がった。坂口さんもいい顔をして龍は嬉しかった。

新生ブルーアトラスはベンチャーズ中心で以前に比べてサウンドそのものは落ちてはいなかったが、いかんせんジャンルの幅が狭くなってしまったので詰まらない。やはり歌は必要だと思った。

デュオグループとのコラボの方が龍はいいなと感じていた。おそらく、聞いている方もベンチャーズ一辺倒では飽きてしまう。ボーカルを入れてのブルーアトラスが急務だと思った。

八時前には、ブルーアトラスの最後の曲が終わった。途中リズムに合わせて踊る人もいて盛り上がったが、龍はそれ以前に疲れがピークに達していた。

お昼前から十時間近く、この暑さとストレスの連続の闘いは異常なものだった。何がこれまで龍を

奮い立たせたのか…。音楽好きはさておいて、負けず嫌いな性格と言い出しっぺの責任感が全てだった。

アンプの電源を落とすと、しばらくして盆踊りの曲が流れた。待っていたようにおばちゃん達が踊りだし、徐々に大きな輪ができた。

「やっぱり、盆踊りにはかなわね」龍は独り言のようにポツつと言った。

集まってくる人の多さ、会場の盛り上がりさ…。ただ、音楽に合わせて踊る…その単純さと龍が今まで準備に準備を重ねてきた音楽祭とのギャップは一体なんなのか…。

音響の加納さんの後片づけを音楽関係者だけで手伝いながら空しくなってくる。町内会関係の人間は誰一人として片付けに残らず、自分達のエリアを片付けるとさっさと帰ってしまった。まあ、明日が本祭りだからそれも仕方がないのかもしれない。考えてみれば夏祭りに勝手に乗り込んできたバンドの存在は、彼らにしてみれば迷惑なものだったのかもしれない。音楽祭はお願いされて企画した訳でもないし…。少しは町内の活性化に貢献をしたのだろうか…。みんな無口で疲れた身体を動かしていた。

それでも、片づけが全て終わり、残った者だけで加納一家を見送り、みんなで「お疲れさあ～ん！」と万歳をしながら今夜の一日を締めくくった。

龍は疲れ果てていた。身体はぐったりとしていてお風呂で汗を流すと横になった。

しかし頭の中にはアンプの音の残響と、今日一日の反省が次から次へと出てきて、なかなか眠れなかった。

次の日に本祭りが行われた。小学生の全児童の踊りの披露、盆踊り、カラオケ、そしてまた盆踊り。毎年行われてきたスケジュールのもとに淡々と進行されていた。

龍は、暗くなってから顔を出した。「今夜もご苦労さんです。」加納さんは「いよっ！」と手をあげた。

加納さんのテントの中に入って、音響の手伝いをちょっとしていた。半分は加納さんの自慢の小学生の娘と遊んでいた。奥さんも首にタオルを巻いてニコニコと話しかけてきた。

この家族とは、これから一年に一回だけだが会うことになる。不思議な心の絆がうまれた。

八時頃に花火が打ち上がった。三〇〜四〇発くらいは上がっただろうか。

それが済むと、盆踊りを踊った人達に景品をあげていた。景品を配る役員のところ到我れ先と列を作って群がった。

どうやらこの花火と景品配りが最後のメインイベントのようだった。理屈なしに何かを貰えるのは人をよぶ。こんなもんか…。龍は空しさだけが残った。「来年はやめよう…」と脳裏をかすめた。

第二十三章 ミドルエイジコンサートの誘い

「私の音楽仲間が今度ミドルエイジコンサートという企画をやるんだけど、でませんか？」
高田さんの奥さんからの電話だった。

「ミドルエイジということは、中年のおじさん、おばさん達のバンドということかい？」

「まあ、一応そんな感じなの」

「いつ、どこでやるの？」

「十月に福祉会館を借りたみたい。」

「福祉会館って、五橋の？」

「そう、行ったことある？」

「いや、ないけど結構広いとこなのかな〜と思って…」

会館というくらいだから、市民会館とか県民会館を龍は想像したのだ。

「私達もでるんだけど、練習不足だし…」自信はなさそうだったが高田さんの奥さんのバンドも出るという。他の出演バンドのレベルのことを聞いてみた。他のメンバーのレベルによつては、場違いということもある。「ブルーアトラスは大丈夫よ〜」という高田さんの奥さんの話に龍は安心した。ブルーアトラスの他のメンバーも「やろう、やろう!」ということで参加を申し込むことになった。

本格的な会場で、本格的なPAでのコンサートはブルーアトラスも初めてのことだった。もちろん参加するといっても招かれる訳ではない。参加者全員で会場とPAの費用を負担するのだ。入場チケットを販売する形でそれぞれのバンドに割り振りがきた。

「お金を出して演奏するのは初めてだね」

「うん。会場が立派だし、PAもプロがくるらしいよ。」

「いい経験にはなるよ。きっと」

龍は個人的にも楽しみだった。本格的な設備と会場でやるコンサート出演は初めてだ。ステージにあがる気分はどんなものだろう。音響はどんなだろう。観客はいつぱいになるんだろうか。ワクワクせずにはいられなかった。

前日の午前中は会場の看板取付とか機材の運搬の手伝いで費やした。全てが手作りコンサートの形だった。

その日の午後からはリハーサルがあった。会館内のステージから座席をみるとそれは市民センターの体育館とは訳が違つ。ステージに上がるだけで身震いするような緊張感があった。本格的な音あわせで一人ひとりのギターの音質・音の高さ、ドラム、ボーカルの高さをミキサーでチェックしながら全体の音のバランスを作っていくのだ。

長髪でいかにも音楽関係をやっているというようなお兄ちゃんが

「はあゝい、リードギター 音下さい」

「はあゝい、OKです」

「次、サイドギター」

「はあゝい、ベースギター」

「ドラム」

「はあゝい」

こんな感じで進められるのだ。

全部のパートの調整が終わると、

「それでは、一曲通して演奏お願いします」

本来は一曲単位で、音の調整をするんだろが、そんなことをやってたら大変な時間と労力がかかる。プロのコンサートを聞きに行く機会は今まで沢山あったが、これの何倍もの設備と音に対する厳しさがあるんだろっなと龍は思った。

市民センターなどでの練習の時は、アンプの位置をそれぞれの音がよく聞こえるようにしてセッテ

イングするので全員の音に合わせることは問題がない。しかしコンサート会場になるとメンバーが横一列に並び形になる、しかもステージが広いので各人の間隔が広くなる。結果それぞれの音が聞きとりにくい。

そこでそれぞれの立ち位置に返しのスピーカーを置いて演奏者に全体の音が聞こえるようにするのだが、今までのコンサートでは返しのスピーカーまで揃える予算もない。だから、本番になると練習の時のギャップが大きくて慌ててしまう。演奏がバラバラになってしまうことがよくある。さすがにドラムのリズムは聞こえるのでみんながドラムに合わせて演奏するのだ。

今回はその返しのスピーカーもあって、全体の音が聞こえてくる。なるほどこれは便利なものだ。演奏がやりやすいのは確かだった。

参加バンドの音あわせが終わったのは、もう五時を過ぎていた。それぞれの力量も大体わかった。やはり、飛び抜けたバンドもいなくてバランスがとれているようだった。

第二十四章 ミドルエイジ当日

ミドルエイジコンサートの当日。

街は随分秋らしくなって少し肌寒い。一台の車に便乗して福祉会館のバンドに用意された控室に入ったのは九時半頃であった。

今日は全員紺のブレザー着用とした。ブルーアトラスのコンサートでステージ衣装を決めたのは初めてだった。紅いネクタイも揃えてなかなかのダンディーぶりが好評だったらしい。

さすがに広い会場は満席とはいかなかったが、出演バンドのみんなが売りさばいたチケットでそれなりに人は入った。しかし、自分の知り合いのバンドが終わると義理は果たしたかのように帰る人、その時間帯だけ聞きにくる人…、結局は出入りが多くて満席になることはなかった。

控室では、寝てるヤツ、一生懸命ギターの練習をしているヤツ、神経質そうに楽譜をチェックしてるヤツ、様々だが心境は自分達の出番を待ちながらみんな落ち着かない顔をしていた。

もちろん、龍も何度もトイレに行っては帰ってきたりしていた。この緊張感は何だろう。控室にはステージで生演奏しているモニターがあつて、演奏している音も流れていた。そのモニターをみながら自分達の出番があと何番目かが分かる仕組みだ。

あと三番目くらいになったところで、全員ステージ衣装に着替え始めた。そして、控室を出てギターをかついで暗いステージの袖まで狭い通路を歩いていく。ステージに近づいていくと段々音が大きくなっていく。前のバンドが演奏を開始した。袖から観客の席が見える。ステージはライトに照らされてまぶしい。一生懸命演奏しているが、ブルーアトラスのメンバーも聞いている余裕はない。龍も前のグループの演奏はほとんど聞いていなかった。

袖には、女性の司会者がモニターを見ながら、椅子に座っていた。

「リーダーの方、演奏が終わったらインタビューをしますの〜」とかいっている。甘谷さんはこっくりとうなずいたが、聞こえてるのだろうか。前のバンドの演奏が最後の一曲になった。

「どれ、そろそろだな。」

「エイエイ、オー！でもする？」

「んだね。気合い入れていくっか〜」

みんな手を重ね合いながら、「エイエイ、オー！」と小さく声を出した。

司会者が、会釈して前のバンドのインタビューをしに、ステージの方に歩いていった。慣れているのか、堂々として見えた。

前のバンドの連中がステージから引き上げてきた。紅潮した顔には満足そうな笑顔だった。

「頑張ってください」とハイタッチしながら、側を通っていった。

いよいよ、出番だ。

「それでは、次のバンドは、ブルーアトラスです。どうぞ」という紹介のアナウンスに導かれて、紺ブレのブルーアトラスが、狭くて暗い袖からステージに向かった。目の前がぱくっと明るくなった。開放感のある広い空間の中に観客席とステージが、そして筒状になった広い天井までの空間に演奏した音がいっぱい広がる訳である。

それぞれの立ち位置に向かって、アンプにシールドを差し込んで、ハナちゃんもドラムのセンターに座り込んで用意はできた。

みんなの顔を目で追った。

ケンケンケンケン、いつものようにハナちゃんのスティックがカウントをきった。

そしていつものベンチャーズのパイプラインでスタートした。

たしかに返しのスピーカーから全体の音が聞こえてくる。甘谷さんは遠くに見えたがベースの響きもバンバン聞こえてくる。ハナちゃんも目を合わせながら「気持ちいいな」という顔をしていた。

他のメンバーも緊張感がとれて乗ってる感じがした。

「えー、こんにちは。夕陽が丘からきたブルーアトラスです。今日はわざわざ地元から応援に駆け付けてこられた方もあって感謝してます。ありがとうございました」龍はこんな調子のMCから始めた。拍手が聞こえた。メンバーの地元の誰かの知り合いだろう。

ベンチャーズは結構ウケが良かった。他のバンドの曲がどちらかというとメジャーな曲が少なかった。ので聞く方はやはり知ってる曲がいいんだろうと思う。やはり選曲だ。

今日はベンチャーズを三曲、加山雄三を二曲やって、最後にまたベンチャーズの予定だった。順調に予定の曲が進んだ。いつもの練習のままうまくいった。

龍のMCは長すぎたかなと思いつながっていたが、それでも最後の曲を終わると袖の方から「まだ時間余ってるからもう一曲大丈夫だよ」のサインがでた。

「え、どうしよう。」みんな顔を見合わせた。

リーダーが「ヘイさん、さすらいのギターやって」と遠くからこっちを見ながらしゃべってる。龍は人差し指で自分の顔を指さして「え！オレがリードギターかよ！そんなに練習していいねーべ」と思ってるうちに

「それでは、リードギターが変わります。」と甘谷さんがしゃべってしまった。

「え、どうすんの」

ハナちゃんはこっちみて、ニ「ニ」してるし、時間もたつし、しかたなく龍はその気になった。

ケンケンケンケンとハナちゃんのカウント。

ジャーン、ジャジャジャジャーン

いきなりメロディから入るこの曲は少し中東の砂漠地帯を思わせるようなメロディーで、龍のエコーを効かせたギターの音が練習の時は「その音いいね」と好評ではあった。しかし、いつもどっかでひっかかってしまうので、龍も自信はなかった。まして、予定にはいれてなかったなので、最近ほとんど弾いていない。無謀だった。

やっぱり龍が音を外した。瞬間リズムから遅れた。リードギターが途切れたが、演奏は続いている。このまま行くしかない。龍は立て直そうとして途中から演奏しだした。そんなには目立たなかった。ところが、サビのところでもた、つまずいた。あわてた。「ヤバイ！」頭が真っ白になるのが分かった。

また、リードギターが途切れた。それでも演奏は続く。最後に初めと同じメロディーがある。そこまで途切れた。龍にはえらく長い時間に思えた。そのメロディーを弾いて、ジャーンで曲が終わった。

いやいや、参ってしまった。龍はスゴスゴと袖に帰ると、ステージではリーダーのインタビューが始まっていた。地元の応援のおばちゃんの花束を持ってステージにきて、甘谷さんがそれを受け取っていた。

控室に戻ると「うまくいったのにー！最後にヘイさんがぶっ壊したー」とハナちゃんが大笑い。ひとの気もしらないで、龍は段々と小さくなった。

片付けを終わらせて、帰りの車のなかで、「友達がテープに録音したから聞く？」と甘谷さん。「聞く、聞く」とハナちゃんは龍の顔を意地悪そうに横目でみながらはしゃいだ。「もう、いつまで言ってるの。悪かった、悪かった」と龍が言ってるうちにテープが回り出した。

さて、問題の「さすらいのギター」が始まった。「なかなか、いい音だね」と意外にいける。たしかに途中で音が途切れたが「あんまり、気にならないっすよ」とハナちゃん。あまり龍は聞こうとしなかったが、まあ、なんとかテープは最後のジャーンで曲は終わっていた。

第二十五章 社交ダンスとの出会い

この年、ブルーアトラスは社交ダンスのバックバンドもやった。それはハナちゃんが持ち込んできた話だった。

「得意先の人が社交ダンスやってて、バックミュージックを生バンドで…という話なんだよ」

「月に一回づつ、ダンスパーティがあって、結構人が集まるらしいっす」

「社交ダンスにベンチャーズでは、あわね〜べ」

「いや、踊りによっては、いいんだってさ」

「今度、ブルーアトラスの練習見に来るっていうんだけど…」

「まあ〜ね。面白そうだけど」

次の週末、その社交ダンスご一行様は早速やってきた。

頭の禿げたオヤジと化粧の濃い五十代の女の方が三人でやってきた。

「こんばんは〜」甲高い声で挨拶をしながら市民センターの会議室に入ってくるとハナちゃんを見つけてニヤッと笑った。

なんとなく腰がクネクネした禿げオヤジは、自前のエレキギターをもってきた。一曲弾こうとでも

いうのだろうか。簡単な挨拶を交わすとさっそく背の高いスラックとした女の人が「なんか一曲演奏してくれるかしら」といいながらも一人の少しぷっくりした相棒と手を組んだ。

「ベンチャーズでいいですか」初めっから乗り気のない甘谷さんが、ぶっきらぼうに言った。
「いいですよ」とクネクネ禿げももう一人の女の人と踊る準備をしていた。

ダイヤモンドヘッドをやった。

二組は勢いよく踊りだした。

「いいです」

「全然、大丈夫。踊れます」

と途中こっちをみながら、なんの踊りかはよく分からないが、なかなかの格好良いステップだった。

「どうですか。こんな感じなんですけど…」

「ぜひ、お願いしたいです」と女性三人は、さっき会った印象とは随分と違って上機嫌になっていた。

「あの、荒木一郎のマックス・ア・ゴーゴー」やれますかね」と自前ギターの禿げオヤジがいいだした。

「私の歌とギターをやりたいんですが…」

「はあ、知ってますけど、楽譜もないし…」とやる気のない返事は甘谷さんだ。

「そうよね。急にきてお願いされてもね」とぶつくりした女の人が愛想良く助け舟をだした。

あきらめきれないのか、禿げオヤジはコードを弾きながら、マイクに向かって歌い出した。ハナちゃんは一応得意先ということもあり、ドラムを叩いてリズムを作っていた。

「ん、こうだっけかな」途中コードを忘れたのか歌うのをやめたが、それはひどい歌だった。

「それじゃ、来月も月例のパーティがあるんですが、大丈夫ですかね」と禿げオヤジは甘谷さんとは気が合わないと思ったのか、龍の方を見ながらしゃべりだした。

「はあ、でもマックス・ア・ゴーゴーもやるんでしょ？」

「んだね。わたし、あの歌好きなんだよね」

「それじゃ、少し練習もしなきゃないし、来月は無理でしょ」

「んだね。あと花山さんに連絡しながら…ということだ」とハナちゃんの顔をチラッとみて禿げ頭をぺこっと下げた。

三〇分はいただろうか。化粧の匂いをぷんぷん残して一行は引き上げていった。

「やんだ、あの人」一行が帰るとすぐに甘谷さんは、気が合わないようだった。

「ハナちゃん、どうなの？ やんないとまずいんだよね」

「うん、できれば。得意先の人だし…悪い人ではないんだよ」

「うーん。やるべ」と龍は甘谷さんをみた。

甘谷さんは頭を縦に振りながら、「仕方ねえよね。後はハイさんに任せるから」ということになった。

そのあと、ハナちゃんを通じて何回か練習をすることになった。

例のマックス・ア・ゴーゴは、龍と禿げオヤジが一緒に歌うことになった。

それに背の高いスラッとした女の人が、江利チエミの「テネシーワルツ」を歌いたいんですけどという話があった。なるほどワルツなら社交ダンスでウケそつだ。

その話にはオールディーズの大好きな甘谷さんも乗り気になった。

二回の練習で本番を迎えることになった。

クネクネ禿げも「真っ赤なドレスをきみに〜」 「へへいマックス」 「ゴーゴーゴー、ゴー」
とか上機嫌に歌っていた。ギターのベンベンと弾くのは、やめてほしかった。

二ヶ月後、初めてのダンスパーティーに演奏することで決まった。お昼付きでギャラもいたでくことになった。ブルーアトラス初めての出演料がついた。音響関係は全てこちら持ちなのでギャラの話は当たり前のように進んだ。

第二十六章 社交ダンス当日

十二月の初めの日曜日にダンスパーティーは開催された。会場は仙台市に隣接した利府町にある町民センターのホールだった。

楽器と機材を運んでホールに入っていくと、すでにおばちゃん達がヒラヒラの派手な衣装に着替えて、そしてびっくりするような派手な化粧をして会場は賑やかになっていた。負けずとおじちゃん達が頭をツルツルにさせながらも黒のスーツを着てきめている。

なんとという世界なのだろうか。お年寄りも元気がいい。これから踊りだそうと会場はすでに香水の匂いと熱気でムンムンとしていた。

「今日はよろしくね」と背の高い女の人とクネクネ禿げオヤジが、会場のステージで機材のセッティングをしているとやってきた。どちらも着替えて夕陽が丘の市民センターで練習したときは別人のようになっていた。

「えーっと今日のスケジュールは、初めに何曲かCDで踊ります。そしてその後二曲ベンチアーズをやって、ちよっと休憩。その後私に私の歌とこの人のテネシーワルツをやって、またベンチアーズ一曲という感じでーすかね。」と禿げオヤジがメモを見ながら説明した。目は忙しそうにあちこっ

ちキヨ口キヨ口として落ち着かない様子だった。

「はい、了解です。リハーサルはいいですか？」

「やるなら…そろそろやっておかないと…」

背の高い女の人は

「そうね。声を出しておこうかしら」と少し緊張気味なのが、目の下のあたりをピクピクさせていた。

クネクネ禿げオヤジも

「ギターの練習しておこう」

とチューニングもままならない自前のギターを取り出して

「どのアンプを使ったらいいですか？」

「つなぐ線がないんだけど…」

なんか、本当に落ち着かないのか相変わらずキヨ口キヨ口している。

しかし、少し音を出してから自信が薄れてきたのか、結局はギターはあきらめたみたいだった。

「ギター弾きながら歌うのやめっかな」

「歌に集中した方が、いいすよね」と龍をみた。

龍はだまつてうなずいた。

メンバーたちが控室でセッティングを終わらせて談笑していると、そこに最初に夕陽が丘の市民センターで会ったダンスの三人のうちの一人がやってきた。

「どうも、ご無沙汰です、これ召し上がってください」と

おにぎりとおかずを入れたタッパーをテーブルに広げた。もうお昼を回っていた。

お昼を食べて間もなく、会場の方からはCDのダンス音楽が聞こえてきた。いよいよダンスパーティーの開始のようだった。ブルーアトラスのメンバーもスタンバイして、今回も紺のブレザーを着た。

CDの音楽が数曲終わると、ステージにクネクネ禿げオヤジが上がって

「こんにちは。今日は生のバンドさんに来てもらいました。いつもとは違う企画でやりますので楽しんでください。私も歌いますので…」えへへへと腰をクネクネさせた。

「それでは紹介します。ブルーアトラスさんです」

ケンケンケンケン。毎度のハナちゃんのスティックが鳴った。

確かに、この会場に生バンドは迫力があつた。CDで踊ってた人達はまず一曲目はボーッと聞く人がほとんどで、踊りだしたのはクネクネ禿げオヤジといつものダンスメンバーだった。つられて踊りだそうとした人もいたが、ベンチャーズの曲はなんせどれもこれも短い。踊りだそうとしたときには、ジャーンとエンディング。手を取り合つて踊りだそうとして、ずっこけているカップルもいた。

二曲目からは、一曲目に飛び出して踊り始めようとした人達も含めて数組が踊りだした。しかし、ベンチャーズの曲では年配の人が多いのでワルツとかブルースのような遅いテンポでないと向かないのかもしれない。だから、荒木一郎の遅いテンポの「マックス・ア・ゴーゴー」は以外と踊れるのかもしれない。

それでも、会場は盛り上がりを見せてクネクネ禿げオヤジも背の高い女の人もたまにこちらを見てご機嫌の様子で踊っていた。他の年配のカップルに比べると抜群に踊りはうまかった。

クネクネ禿げオヤジの「マックス・ア・ゴーゴー」と「テネシーワルツ」はやはりウケた。さすが

は主催者。本人が歌う訳だから上手下手は別にして踊り終わると拍手喝采だった。ウケだけではクネクネ売げオヤジには勝てなかった。

初めてのダンスミュージック。やっぱり、ここでも選曲の大事さであった。

ハナちゃんの情報では、相変わらずダンスパーティーは月例で続いているらしいが、その後、クネクネ売げオヤジと再会することはなかった。

第二十七章 新メンバー加入

翌年の四月、小学校のバンドを編成していた和志先生が転任になった。和志先生とは龍は町内の夏祭りでは顔識がなかったが、小学生の父兄から今年の夏祭りにぜひ和志先生にサザンの「TSUNAMI」を歌えるような企画は作れないか…という問い合わせがあった。

話の内容は、和志先生の送別会で和志先生が「TSUNAMI」を歌ったらしい。それを聞いた父兄が夏祭りで歌えばいいのにと…ということになったのだそうだ。そんな相談を受けるくらい、龍は町内の音楽の中心にいらるようになっていた。

しかし、龍は今年の夏祭りはどうしようかと悩んでいた。去年のあのドタバタ騒ぎ…すっかり「もうたくさんだ！」と頭の中では「出ない！」と決め込んでいた。ところが、坂口さんのビートルズと達ちゃんバンドのメンバーから「今年も楽しみにしてますから〜」と夏祭り出演の話がすでにきていた。

たしかに、楽しみにしている出演者、観衆はいるんだと思うと龍は後には退けないという気持ちとが交差していた。そして、三丁目の会長からも「平井さん、今年も頑張つてね〜」と市民センターで会ったときに頼まれてはいた。もう一年頑張ってみるか…と思った。

龍は考えていた。ブルーアトラスのジャンルの幅を広げないと出演する舞台が限られてしまう。坂

口さんがいた頃にベンチャーズ以外の演奏が増えていい線にいったのだが、坂口さんが辞めてまた前のブルーアトラスに戻ってしまっていた。

和志先生をブルーアトラスに迎えようか、と龍は思ったのと同時に、チラシ募集でやってきた若井さんの歌唱力がもったいないとずーっと思っていた。若井さんは少しだけブルーアトラスにいたが、キーボードを弾くだけなら…と辞めていった。

龍は和志先生と若井さんに電話した。

「ぜひ、ブルーアトラスの一員になって欲しいんだけど…」二人とも、いい返事をもらった。根回しをしておいてから、メンバーに相談することになっていた。

そんな時に、甘谷さんからも相談したいという連絡があつて、久しぶりにメンバーが顔を合わせた。

「実は」と一枚のチラシをみんなに甘谷さんがみせた。

そこには、「キリンフェスティバル演奏者募集！」と黄色の地色に黒で印刷されていた。

「これに申し込んでみたらと思うんだけど」

「へえ、大きなイベントだね。どう申し込むの？」

みんなの目がキラキラと輝いた。

「デモテープをとって送って、審査に通れば…だけど」

「今度、練習の時に録音するから、いいかな」

どうなるかは分からないが、挑戦しようというメンバー全員の見意だった。

「それから、相談なんだけど、和志先生って小学校の…」

龍が話した。

「あの先生歌がうまいらしいんだよ。」父兄からの話も交えて説明した。

「前から言ってるように、ブルーアトラスの幅を広げた方がいいと思うんだよ」

「それと、若井さんに電話してみただけど、彼女も歌の方ならぜひやりたいということなんだ…」

達ちゃんとソウちゃんは「誰？」という顔をしていた。

「あんた達が入る前に、一度ブルーアトラスに入っただよ…」ハナちゃんが説明してくれた。

「一回、二人に会ってから決めたいのだけど、どうかな？」

「うん、いいと思う」

「でも、どんな歌やるの？」とハナちゃん。

「まあ、それも相談してから…」

ということで、新しいブルーアトラスの目標が決まった。

もし、キリンフェスティバルに出るようになれば、ブルーアトラスの株は一気に上がるような気がした。ようするに町内とかの枠を大きく突き破って進んでいける。

それに、二人のボーカルが増えれば、ブルーアトラスの幅も一気に広がって、いろんな舞台での演奏ができるようになる。そう思っただけで、ワクワクするような気持ちであった。

第二十八章 キリンフェスティバル出演

二つの朗報は、待つことなく届いた。

ブルーアトラスの練習の日に、和志先生と若井さんがやってきた。

和志先生は「こんにちは」と緊張気味にやってきた。若井さんは「ご無沙汰してました」と以前より少しふつくらした感じであつた。

二人は快くブルーアトラスに入った。雰囲気合う。龍は直感的にこの二人なら問題がないと思つた。

そして、「キリン、OKだつて！」興奮しながら甘谷さんが発表した。

「へえーい やったねー！」

「いやー よく通つたねー」

「こりゃ 真面目に練習しなきゃ」とみんなに緊張感が走つた。

そんな訳で、新生ブルーアトラスは、二人の加入とキリンフェスティバル出演という大きな目標に

向かって動き出すことになった。しかし、キリンは、ボーカル抜きで考えていた。練習の時間がなさすぎたからだ。二人の出演は夏祭りからにしたがもちろん練習は同時進行でやった。

気持ちが前向きになると龍の本業の仕事も一緒になって忙しくなっていたが、夏に向かって忙しさも一段落する時期ではあった。六月キリン、七月夏祭り。龍は昨年にしてバンド活動も忙しくなっていた。そんなところに、小学校から電話がきた。

「あのー、私、今年の小学校の音楽部の担当になった者ですが…」

「はい、和志先生の後任の先生ですか?…」

「はい、そうです。今年の夏祭りのことで相談がありまして、お会いしたいのですが…」

「はい、わかりました。そちらの都合に合わせますので」

二、三日後の夕方、その先生は待ち合わせの市民センターにやってきた。

「実は、子ども達が今年の夏祭りに出たいと申しまして…」

「はい、いいですよ。去年も和志先生と一緒に出ましたし、実は和志先生も今度我々のメンバーになりましたから、協力してくれますよ」

「そうですか。安心しました」

「機材関係も心配しないで、こちらの方でやりますから」

その後、和志先生と一緒に小学校のバンド練習にお邪魔したが、和志先生の子どもの達の人気はものすごいものであった。結局、和志先生が古巣の小学校のドラムを担当してまとめるという話しに決まった。新任の先生はホッとしたのか大喜びだった。

小学生が出るのなら、中学生、高校生もあるよなと龍は思った。段々地域の音楽祭らしくなってきた。

「そうだ、中学校のブラスバンドはどうだろうか」とひらめいた。さっそく町内会を通じて照会してもらって校長の許可をとることができた。今年の夏祭りは子どもから大人まで、いい祭りになりそうだ。これなら町内会のジジイ達も文句はいえまいと龍は自信がでてきた。

キリンフェスティバルが行われたのは、六月半ば、午前中から今にも雨が降り出しそうな梅雨空の日曜日だった。

ブルーアトラスのメンバーは仙台港近くにあるキリン仙台工場に車を走らせていた。

この日曜日の午前中に東北放送のラジオのライブ番組に出演することになった。この話は一週間前くらいに突然話しがきて、キリンフェスティバル出演者が一曲づつ演奏するというものだった。ブルーアトラスの演奏もラジオから流れる。

なんか凄いことがブルーアトラスには起こりだしていた。九月には定禅寺通ジャズフェスティバルに応募して出演が決まった。リーダーがキリンに申し込んだデモテープを同じように送っていたのだ。二〇〇一年当時は申し込めば落選することはなかったが、アマチュアバンドの憧れのジャズフェスである。

キリンビールの工場の一室には機材が運ばれていた。それらしいプロの人達が忙しそうに動いていた。そして、ブルーアトラスのメンバーにいろいろと指示をすると一回だけのリハーサルで本番である。

キリンビールのコマーシャルが流れ終わると聞いたことのある名前の東北放送の男女のアナウンサーが話し出した。本番録音放送の始まりである。

これは久しぶりに緊張した。ラジオとはいえ、公共の電波に乗る訳である。リードギターの達ちゃんも普段も一見恐そうな顔をしているのだが、それはかなりこわばった顔をしていた。この日は新曲の「春がいっぱい」をやった。きれいなさわやかなメロディで、ベンチャーズよりはいいだろうというみんなの結論だった。スローテンポでリードギターは間違つともろに目立つ。達ちゃんの顔は青くて恐い目だった。

「はぁ、いい、OKです。お疲れさん」演奏が終わるとビールが出された。さすがキリンビールさ

ん。ホツとしたように飲めないリーダー以外はビールを飲んだ。

次は演歌のおばさんが一人ながら場慣れした歌唱力で歌っていた。「うまいね」ビールのお代わりをしながらみんなその演歌に聞き惚れていた。

キリンフェスティバルの開始は昼からであった。梅雨時ということでキリンビール仙台工場の一角にある倉庫に横付けしたようにステージが作られていた。トラックが入りする屋根付きの駐車スペースだ。そしてその周りにはお客さんの椅子テーブルが並びいっぱいの観客だった。食べ物や飲み物のブースがあり、賑やかな場所になっていた。

今日の出演者は、若い女の子のバンド、ヤマハの講師達で作っているPOP系のバンド、プロのバンドが一つと、ブルーアトラス、そしてなぜか演歌のおばさん。五組で二時間半のコンサートだった。ブルーアトラスは演歌の次の三番目の出演だった。

このコンサートの司会も東北放送の男のアナウンサーがノリのよい司会で会場は盛り上がった。

司会者は「ブルーアトラス！」と左手を大きくあげて紹介した。

今日も紺ブレのメンバーはばっちりときまっていた。

ベンチャーズ主体の選曲でのぞんだコンサートは広い会場いっぱいに響き渡った。食べながら飲みながら会場はザワザワとしている。こういうところは元氣なエレキサウンドがいい。

梅雨空ではあったが気持ちのいい三〇分の演奏であった。

あのラジオ番組はいつ流れたのかメンバー達は誰も知らなかった。というか次の夏祭り、ジャズフェスに気持ちは向かっていた。

第二十九章 また夏祭りがやってきた

町内会に企画を提出して音楽祭をやるうと頑張った去年の夏祭り。いろんなことがありすぎて、もうこんなことは二度としないと思いがらも結局龍は今年もまた夏祭りに関わっていた。去年一緒に頑張った仲間達からの声、夏祭りに出たいと思っている子ども達や新しいバンドの人達の声を無視するわけにはいかなかったのだ。

ブルーアトラスは他に活躍の場が広がったこともあって、夕陽が丘の夏祭りはパスしたらという意見もあった。しかし、龍は新しいメンバーも入ったし新生ブルーアトラスの披露は夕陽が丘の夏祭りで行いたい気持ちが強かった。

今年は去年のミスを反省して龍は慎重にことを進めた。まず、会議に出て意見を述べた。出演者にせめて弁当と飲み物くらいは出して欲しいこと。ステージの位置と観客の座る椅子を用意して欲しいこと。時間の設定を五時半に子ども達開始で夜の八時までにして欲しいこと。

予想はしていたが、ことごとく、いちゃもんをつけてきた。

龍は会議の中で「私達は他の地域の町内会の夏祭りに出させてもらっていますが、どこにいてもお弁当と飲み物くらいは快く出してくれます。他の地域からわざわざ夕陽が丘の夏祭りを盛り上げようとしてくれる人達に飲み物一本なくて失礼とは思わないのか。」と少し声を大きくして述べた。そ

して「弁当が食いたくて言ってる訳ではない。気持ちのことを話してるんです。役員の弁当の立派さには昨年は正直驚きました…」と嫌味をひとつ付け加えた。

「まあ、予算もあるので…」と企画担当の会長の答弁ではあったが、ここだけは譲れないと龍は思った。たしかに今年は子ども達の出演人数も増える。しかし、盆踊りで一回踊った人に景品をあげる予算があるのなら、演奏者におにぎり一つも出せないのかと食い下がった。そして勝ち取った。

中にはムツとしている会長もいたが、連合町内会は概ね龍の要求は飲んだ。おそらく、町内全体的には去年の音楽祭の評価は高かったのではないかと思う。初めての試みとして住民に受け入れられたのだと思った。

夏祭りに向けての練習は毎週日曜日に行われた。ベンチャーズは完成されていたので流す程度にした。ボカルの練習が主になった。

和志先生は、「カズちゃん」とハナちゃんに呼ばれるようになって、メンバーにうち溶けていた。そして約束通りサザンの「T-SUN-AM」をやることになった。

一方の若井さんの歌唱力は抜群で英語の歌は驚くほどのものだった。英会話の講師をやっていると聞いて、みんな「なるほど」と納得した。若井さんのリクエストでプレスリーの「I need you I want you I love you」という歌をやることにした。

その他にオールディーズの曲を二曲とピーナッツの「情熱の花」は若井さんと和志先生のハモリも

あつていいノリに仕上がった。

とにかく、ブルーアトラスは二人の強力なボーカルをメンバーにして、大幅にイメージチェンジをしたのだった。

夏祭りは今年も加納さんにPAをお願いした。自慢の娘と奥さんを連れてトラックに機材を満載してやってきた。

「こんにちは。よろしくね」

「でかいスピーカー 二発買ったからもってきた」

「すげえ、力、はいってるね」

「よろしくね」

去年の反省もあったので、今回はスムーズに準備も進んだ。

今年はステージをぐっと観衆の集まる屋台に近づけた。椅子も用意した。また、キャンプ用の簡易テール持参も呼びかけたことも功を奏した。そこで音楽を聴きながら飲み食いもできるスペースを用意したのだ。昨年のドタバタは今年はなかった。

恒例の長い開会式も簡単に終わらせ、夏祭りはスマートに始まった。

最初の小学生バンドは和志先生のドラムを囲むようにメンバーが寄り添い、父兄たちがカメラのシャッターをパチパチ切りながらアットホーム的な演奏になった。出演依頼をしてきた担当の女の先生も嬉しそうに肩を揺らせていた。

新しい中学校のブラスバンドの企画は、当時一部の生徒達が荒れていた経緯もあって中学校の子ども達を音楽で夏祭りに参加させた意味は大きかった。ちょうど仙台市のブラスバンドの大会の当日で、会場から直接祭り会場に駆けつけた生徒達は少し疲れた様子だったが大会で演奏した課題曲を三〇人くらいの編成で演奏した。

この中学校の生徒達の演奏は後に中学生バンドの結成に繋がり、大人達が音楽指導をして一緒になっってバンド作りを手伝った。そして、それが小学生の子供バンドにも繋がっていく。大人から子供まで地域の音楽活動は盛んになっていった。

今年はさすがの青山ジジイもおとなしくしていたが、相変わらず電気がどうのこうの、音がどうのこうのと龍の側にやってきてはブツブツと話していた。まさか、これが青山ジジイとの最後の夏になるとは思ってもよらなかったが…。青山ジジイが例の会議でもめた弁当を私に手渡してくれた時のニヤッと笑った顔が妙に印象に残った。

それに音楽祭の企画を初めに提出した二丁目の優しい加賀さんもこの年のお正月に急逝した。天国で楽しく聞いてくれるのかなぁと龍は思った。そういう思いも龍を後押ししてくれた今年の夏祭

りであったのだ。

新生ブルーアトラスは良かった。和志先生は小学生の子ども達と父兄をたくさんよんだし、若井さんの歌はとにかくウケた。その中にベンチャーズとオールディーズの曲がほどよく入り交じって、ブルーアトラスのスタイルが出来上がったと龍は思った。

「今年は最高に良かったね」とP Aの加納さんも喜んでいた。他の出演したバンドからも今年はやりやすかったとの声が聞かれた。龍はなにより嬉しかったし、やはりやって良かったなと思った。

後は日曜日の観衆の多い本祭りにやれば…。龍の音楽祭は達成できる。目標はそこにおいていた。

第三十章 ジャズフェス出演

この年のブルーアトラスは本当に忙しかった。

夕陽が丘の夏祭りの翌週の日曜日は夕方から夜にかけて掛け持ちのコンサートになった。

ソウちゃんの町内会の夏祭りに出演が依頼されていた。その後と同じ日にハナちゃんが卸町の運送協会からの夏祭りの話しを持ってきたのだ。

「時間さえ遅くてもよければなあ。交渉してくれる？」

「そこをやって、卸町から片付けて、ソウちゃんの町内会までだから、やっぱり二時間はみなきやなあ」

「卸町を五時半頃に終われば、七時半にはソウちゃんの町内会に間に合いそうだけどね」

「ソウちゃんのところは、八時スタートで三〇分くらいでいいのかな」

まるで、売れっ子のバンドのような会話をしていた。

八月はもう一本夏祭りのステージがあって、ブルーアトラスは毎週演奏をしていた。この頃からはギヤラも入っていたので、メンバー達も段々それが当たり前のような気持ちに変わっていた。

「今度はいくら出るの〜」

「やっぱり、うちの町内会はおかしいよね」

「へいさん、来年は夕陽が丘の夏祭りなしだよ〜」と天狗になりだしていた。

暑い夏の休みなしの毎週だから、みんな八月の終わりになる頃はずっとたりとした感じになっていた。プロの人はこれが一年中続いて、売れっ子になれば毎年毎年追われるんだと思うと、趣味の世界で良かったと龍は思った。

それにしても、忙しい熱い夏だった。

定禅寺ジャズフェスティバルは、九月の第二土日に行われた。この年で第十一回目を迎えていた。

当時は申し込みをすれば誰でも参加できる時代だった。それでもジャズフェスに出るにはそれなりの実力と場数を踏んでいないとかなり緊張度の高いステージだ。仙台市街のど真ん中で演奏するわけだから、色んな人達が通りすがりに聞く。聞いてもいいなと思えば立ち止まるし、聞かなくてもいいやと思えば素通し。はつきりしているので結構ブレッシャーはかかる。また高レベルのバンドとも競演することになるので技術力が歴然とわかる。しかし、このころのブルーアトラスは恐い者知らずであつたことは確かだ。

当日は朝からカラッと晴れ渡ったいい天気だった。この日の日曜日はジャズフェスのイベントと重なっていつもに増して街の中が混雑していた。特に定禅寺通りはジャズフェスのパンフレットを片手にしている人で溢れていた。そんな中を楽器を背負って歩く人達もあちこちにいてすぐに出演者とかかる。ブルーアトラスもその一グループになっていた。ブルーアトラスは勾当台公園の二番町側の入口からすぐの人通りの多いブースだった。

ブルーアトラスの出演は午後一時半から三〇分で、出演する二バンド前には会場にスタンバイしてなければならぬ。勾当台公園そのものにも何力所かブースがあり公園の中は人でいっぱいになっていた。そしてやはり人気バンドの出演する時間となるとブースの前はすごい人だかりだ。プログラムを見ながらお目当てを聞きに集まってくるのだ。

ブルーアトラスの前のグループにトラブルがあった。寸前になってエレキギターの音が出ない。ギター本体のトラブルのようだった。演奏者は焦ってギターを診ていたが時間がかかっている。前にいた観客がスーッと退いてしまった。

「あれ、まずい」龍は咄嗟に聞いてくれる人がいなくなる…ブルーアトラスにも影響するかも…と心配になった。そのバンドは後一〇分位を残して演奏を始めたが観客を呼ぶまでには至らなかった。時間もスケジュール通りなので延長も許されず可哀想だった。

そのグループはショボンとして後片づけをしていた。声を掛けようと思ったが次は我が身と思うと

自分の準備で精一杯だった。それぞれの演奏時間の間も一〇分位しかないのでトラブルがあると前のバンドのようになってしまう。チューニングをしっかりして、後はアンプにシールドを繋ぐだけの状況にしてスタンバイしていた。

予定通りの時間でブルーアトラスの演奏が始まった。今回もベンチャーズ主力で若井さんと和志先生は応援に回った。いつものベンチャーズをいつもの順番でやる予定にしていた。MCもほとんど曲紹介くらいにしてベンチャーズのオンパレード。

公園の入口という利点が功を奏して、観客が徐々に集まってきた。元気のいいベンチャーズサウンドは我々の同年輩だけでなく耳障りのいいホツとするところがある。しかし、何曲かを聞くとスーッと次のブースに移動してしまう。そして、スーッとまた新しい人が立ち止まる。そんな繰り返しで演奏が終わるまでそこそこの観客で埋まっていた。

憧れのジャズフェスは、あっという間に終わってしまった。特別緊張する訳でもなく、坦々と曲をこなしていったという感じであった。何だろう…龍には満足度はあまり感じるころはなかった。やはり観客と通じるところがないからだと思った。ただ弾いてるだけで、「やったあゝ」の満足感はないかった。

ただ、ジャズフェスの出場はバンドマンとして一つの勲章になったことは確かだ。

特に近年は審査が厳しく誰でも出れるというものではなくなっていました。

龍はジャズフェスの季節が来るたびに「私も出たことがあるよ」と自慢することがある。自分の技力を考えると全くラッキーではあった。今の出演者は素晴らしくて、何かしらのパフォーマンスと珍しい組み合わせのバンドとか、個性がないと出れない傾向があるような気がする。普通のおじさんバンドではハードルが高くなったのかもしれない。

第三十一章 それぞれが別の道を…

憧れのジャズフェス初出演も一つの通過点くらいにしか思えないくらいブルーアトラスの出演予定はその後も続いていた。

ある会社の創設五十周年記念パーティー、学校の同窓会のパーティー、ヨット倶楽部の二十五周年パーティーなどの余興としてのステージが、ワシントンホテル、リッチフィールドホテル、ホテル江陽、メルパークなどホテル会場での仕事が続々と舞い込んできた。

メンバーの友人、知人からの紹介だったり、どこかでブルーアトラスの演奏を聞いたことがあって、そこからのオファーだったり、龍はその都度ホテルに行つて会場を下見しながら担当者と打合せに出掛けた。演奏時間、演奏曲目、音響、参加人数そしてギャラの交渉もした。

二、三年前のブルーアトラスでは考えられないことだったし、一体自分は何様になってしまったのだろうとさえ思ったほどだ。もちろん、メンバーの気持ちも変わってしまった。すっかり天狗になってしまっていた。ホテルで用意された部屋で食事をし、三〇分程度の演奏をして、ギャラをもらつて…あの初々しい町内バンドはどこに行つてしまったのだろうか。少し龍は違和感をおぼえ始めていた。

この年は暮れまで忙しかった。他にも仙台東部のライブハウスみたいなどころに出演したり、キリンフェスタで知り合った演歌のおばさんとジョイントコンサートをやったり、とにかく幅広い演奏活

動が続いた。

年が明けてようやくバンド活動も落ち着いたものの、春にはまた勝山館で会社の創設記念パーティ、夕陽が丘や他の町内会の夏祭り、去年やった卸町の運送協会の夏祭り…と今年も予定がすでに決まっていた。

しかし、プレーヤーとしての龍は、五年目を迎えて悩み始めていた。

少しづつ熱いものが失っている自分に気が付いていた。龍はブルーアトラスをバンドとしての一歩良い方向性を求めてあれやこれや試行錯誤してきた。しかし、ベンチャーズも好きではあったが自分のやりたいジャンルではないとも思っていた。龍はアコースティックギターを片手にフォークや六〇年、七〇年代のニューミュージックを一人でもいいし、ギター二本、ベースギター、あるいはキーボードといった形のボーカルを中心としたアコースティックバンドを作りたかった。

ブルーアトラスの中では、サイドギターがソウちゃんとダブっていたし、ボーカルも若井さんと和志先生がしっかりと歌っていたので「自分はそろそろ必要ないかな」と思うようになっていた。確かに今まで色々な面で引っ張ってきたし、その存在は大きいものではあったと思う。

春の勝山館でのステージは友人の娘の結婚式とぶつかってしまっていて龍は参加出来なかった。結婚式

式の直前まで勝山館で担当者との最終打合せとバンドの準備を済ませて結婚式の方に出席した。

この日は友人に頼まれてアコースティックギターを片手に結婚式の披露宴で二曲歌わせてもらった。まさに龍がやりたいと思っていた弾き語りである。

「こういう形もいいもんだなあ」とブルーアトラスではない音楽の世界を改めてこれが自分らしい…と龍は思った。

それでも、龍はこの年もまた実行委員会のメンバーとして夕陽が丘の夏祭り企画実行に奔走した。また他の町内会の夏祭り3箇所と運送協会の夏祭りをプレーヤーとしても頑張り続けた。

そして、以前に演奏をして感動したあの若葉の郷から、今度は夏祭りに演奏してほしいという連絡をもらった。あの優しい若者とまた打合せをして一緒にステージを企画した。この時点でブルーアトラスのこれから予定していたコンサートはとりあえず終わった。

これを機会に龍はブルーアトラスのプレーヤーとしての幕を引こうかなと思っていた。

「今回、オレ出ないから、頼むね」

「なんで〜?」

「う〜ん。ちょっと疲れたみたいだ」

「え〜…」

甘谷さんと若葉の郷での夏祭りの打合せを話していたが、薄々気が付いてはいたみたいだった。最近の龍はバンドの仲間と少し距離を感じていた。

自分のプレーヤーとしての存在は必要のないものになっていると龍自身が強く思うようになっていた。

若葉の郷での夏祭りは龍は観客側に立っていた。自分抜きのブルーアトラスが演奏をしているシーンを初めて見た。MCも調子のいいソウちゃんが担当して進行していった。時折、龍の方を見てステージにあがってという仕草をみせていたが、龍はうなずくだけでジッと演奏を聞いていた。

演奏が終わると、夏の夜空に花火が打ち上がった。綺麗だった。なんともいえない気持ちで龍はその花火を見つめていた。

それから数日して少し秋の風が冷たく感じる頃、龍はブルーアトラスをやめると正式に告げた。

ブルーアトラスの活動は龍がやめた半年後にあっけなく解散してしまった。

メンバー達は新たなバンドに参加してそれぞれ散っていった。ブルーアトラスの仲間は4つのバンドに別れてしまった。

結成して五年。ブルーアトラスが地域に残した音楽活動の功績は非常に大きかった。一枚のバンド募集のポスターがきっかけで集まった五人のオジサン達が、本気になって取り組んだバンド。くる日もくる日もバンドのことを考え続けた五人の心はまさしく青春そのものであった。そして、その熱意が地域の場にも根付いて大きな活動の輪が広がった。

その後、龍は一年間演奏活動を中止した。しかし、また新しいバンドを結成しプレイヤーとしても活動を開始した。そして連合町内会の夏祭りの総合企画を担当するに至った。

龍はこれをきっかけに夢の「音楽祭」の実現への完成に向けてもう少し頑張り続けることになる。

龍はその後も夕陽が丘の夏祭りには元ブルーアトラスの全員に声掛けをして参加してもらった。夕陽が丘の夏祭りは、子供から大人まで幅広い年齢層のバンド達が出演し夏祭りの二日間にわたって演奏を繰り広げられるまでに成長した。そして、そのバンド達の中には甘谷さんのベンチャーズバンド、ハナちゃんとソウちゃんのベンチャーズバンド、坂口さんのビートルズバンド、達ちゃんの先生バンド、和志先生はソロで、そして龍のアコースティックバンドも新しい仲間と共にそれぞれ競演していた。

元ブルーアトラスのみんなとは今までにはない新しい付き合い方が生まれた。まるで同級会でもやっけるようなそんな感じがして、みんないい笑顔であった。

ブルーアトラスは龍にとって大きな宝物になった。龍の音楽活動の基本がここにある。

龍の音楽活動の話はまだまだ先があるが、ひとまずここでひとつの歴史を終わることにしよう。

おわり